

第31回

北勢線の魅力を探る報告書

# 東西金井の古里を辿り こだわりの納豆を知る

東金井春日神社



須賀神社



員弁川水管橋



小杉食品  
レクチャー  
工場見学



開催日: 2019年4月20日(土)

主催: 北勢線の魅力を探る会

後援: 桑名市、いなべ市、東員町、北勢線事業運営協議会、三岐鉄道株式会社

桑員まちのファンクラブ、都市環境デザイン会議中部ブロック

桑名歴史案内人の会、ふるさといなべ市の語り部の会



第31回北勢線の魅力を探る「東西金井の古里を辿り こだわりの納豆を知る」

参加者 50人

協力 岡田定久さん、小杉食品

## 馬道駅から金井橋

西羽 晃

平成31年4月20日（土）、快晴の空のもと風もないウォーク日和に恵まれて、第31回北勢線の魅力を探る会が行われた。これまでは年2回の開催だったが、今回から年1回となったので、1年ぶりである。今回は小杉食品見学の人数制限があるため、従来とは違って事前受付制としたので、申し込みが定員オーバーしないか、申し込みせずに当日参加者をどうするか、心配した。しかしスタッフを含めて定員の50人となり、当日参加者は2人だけで混乱もなかった。しかも申し込み者の2人が当日キャンセルとなり、定員ちょうどになった。受付もスムーズに済み、近藤代表の挨拶の後に、同行取材の「みゆ」の記者1人も含めて、総勢51人が定刻の9時より少し早めに馬道駅を出発した。すぐ近くにある「和合橋」を通るが、ほとんどの人は気が付かない、長さ約50cmほどの橋である。この橋の下は水も流れていない溝になっているが、江戸時代以前は町屋川の本流であったと私は推測している。



馬道駅出発



和合橋を見る



サンジルス醸造

馬道の古い街道（濃州道）を通り、右折してから広い道路を横切ると明正中学校が見え、さらにサンジルス醸造の工場の間を通る。この工場は現在は味噌・醤油の工場であるが、もともとは東洋紡績の工場であった。昭和11（1936）年に建てられた建物は戦災に遭わなかったため、古い紡績工場らしくノコギリ屋根である。塀に沿って行くと、紡績時代には二階建ての女子寄宿舎が道路から見えたが、今は寄宿舎は取り壊されている。

さらに行くと江戸時代から続く町屋御用水の傍を通る。大正ころまでは桑名町民の食水道だったが、今は農業用水として使用されている。

国道258号線を渡ると、すぐに町屋川の堤防に上る。ここで東金井の岡田定久さんから話を聞く。対岸の西・東金井の中学生は明正中学校へ通ったが、岡田さんが中学生のころは町屋川を渡るためには、上流の桑部橋か下流の町屋橋を渡らねばならなかった。相当に遠回りになるので、夏は流れの中を歩いて渡り、冬には国鉄の鉄橋を渡ったりした。最初に簡単な木

橋が出来たが、1978（昭和 53）年に現在の橋が建設された。長さ 181m、幅 2.5m で、自動車は通れないが、バイクや自転車は通れる。橋の上から上流を見ると、川が大きく曲がっているのが、よく見える。これは江戸時代に桑名城下町建設の際に、町が洪水に遭わないように、町屋川の流れを変えたためである。この辺りは野田といわれたが、野田は洪水の被害を受けることが多くなり、全村あげて移転した。圃場整備された田が整然と並んでいる。その向こうには鈴鹿の山並みがくっきりと見える。



金井橋の手前で岡田定久さんの説明を聞く



金井橋を渡る



現在の鉄橋

## 金井橋から徳元寺跡へ

山下 博子

東金井の岡田定久さんから金井橋にまつわるお話を臨場感溢れる言葉で聞かせていただいた。その橋を渡り、堤防を下るように進むと東金井の地に入る。ここは江戸時代には「野田」という地名があったそうで、たびたび水災に見舞われたため、住民は他に移住したと云われる。目前に火葬場と墓地が併設されている三昧が見えてきた。昭和 43 年(1968)に市営火葬場が完成するまで使用されていて、地名をとって「野田の三昧」と云う。県道 143 号線を渡り、しばらく続く田畑を左右に見ながら次の見学地の徳元寺跡へと進む。集落の地形は上り坂続き、道幅は狭かったが、人家の庭に咲く色鮮やかなパンジーやビオラ、チューリップが満開で甘い香りに癒されながら歩いていると、ようやく目的地へ辿り着いた。

徳元寺は金井山と号し、浄土真宗本願寺派のお寺であったが今は廃寺となっている。当地の南側の丘陵地上にあった金井城の被官である山家氏の一族の祐西坊が明応年間(1492～1501)に開基したお寺で、長島一向一揆に加担して敗北する。後再興され、本堂は文化元年(1804)に建立された。当寺の「銅鐘」はもと桑名春日社神宮寺にあったが、神仏習合廃止令により、明治6年(1873)頃、当寺が買取った。太平洋戦争中に供出されたが、文化財保護のため溶解を免れた。現在、その鐘は神宮寺の別当であった南魚町の仏眼院に買い戻されて庫裏の西北隅の軒下に吊架されている。寛永15年(1638)銘の北勢地方に現存する最古の鐘で、市の文化財に指定されている。徳元寺の100坪余の跡地は更地化され、10年ほど前まで残っていた本堂、祠堂も今はなく片隅に10基ほどの墓石と、四脚門の礎石跡が残るのみで訪れる人も無く静まりかえっていた。



野田の三昧



四脚門の礎石跡



説明する著者

## 徳元寺跡から東金井・春日神社へ

山下 博子

徳元寺跡をあとにして次の見学地、春日神社へ向かった。道は集落の中を通り神社の入り口までは、やや急な坂道となっていて距離の割には体力を使う。沿道には畑があり、作物を狙う猪対策のネットが張られている。そこを通過すると平坦な道になり、大きな鳥居が私達を迎えてくれた。そしてうっそうとした森に包まれるように春日造の社殿があり、参加者は各自手を合わせた。

この春日神社は中臣氏(藤原氏)の祖神とされる天児屋根命を祀る神社であり、他に天照大御神、火産靈(ほむすび)神、大山津見命が祀られている。明治時代に桑部の長谷神社に合祀されていたが、戦後氏子の総意により旧社地に分祀鎮座された。地元の方は毎年初詣にはこの春日神社に参拝するのが通例だと聞いた、信仰心篤く神社をお守りしているようだ。

桑名市内には石取祭で有名な桑名宗社(通称春日さん)のほか春日神社と称する神社は五座あり、古来から春日信仰が厚いことがうかがえる。

ここでちょっと休憩タイムとなり、次の目的地への英気を養った。



東金井春日神社



説明する著者



## 西金井薬師堂

山下 博子

春日神社をあとに次ぎの須賀神社までは集落の中の単調な地道を歩く。向かうその途中に立派な薬師堂が建っている。歴史的・文化的に価値のあるのではと気になる存在であるが今回のウォークコース外である。

後日、西金井の自治会長の好意に甘え、中を拝見させていただくことが出来た。

堂内には最近新造されたと思われる金色に輝く厨子があり、その中にやや小ぶりな「薬師如来立像」が安置されていた。仏教伝来以後、日本では薬師信仰が盛んでお薬師さんに祈れば、人々は現世利益（現世に於いて現実的な願いを叶える）、どんな不治の病でも助けてもらえると思われた。当地区で毎年2月12日には地元の方々による盛大な祭りが行われるそうだが、いつ誰が興じたのか定かではないと云われる。しかし、薬師信仰が現実に関わっている。

江戸時代後期に編まれた地誌『桑名志』には、この薬師如来は安永6年（1777）に京都の因幡薬師を移したと記されている。

京都の因幡薬師とは今では癌封じ祈願で多くの信仰を集めている因幡堂（平等寺）の薬師如来を指します。したがってこの薬師堂にお参りすることは癌封じのご利益になるのでは、と新しい発見である。

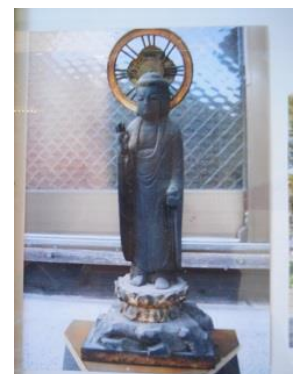
下の右端の写真は、昭和43年に堂の改築の際、一時堂外へ出された薬師如来立像。



薬師堂



薬師堂内厨子



薬師如来立像

## 須賀神社

伊藤 通敏

薬師堂を過ぎ、西金井の集会場を兼ねる御講堂の前を通って緩い坂道を登ると須賀神社である。この神社は桑部の長谷神社の分霊を祀る神社として西金井に鎮座している。この神社の社殿は土蔵造りで、昭和3年に桑部小学校の奉安殿として作られた建物を戦後移築し社殿に転用している珍しい神社である。奉安殿とは戦前の日本の学校で、御真影（天皇・皇后の写真）と教育勅語を納めていた建物で、桑名市内に現存する唯一の奉安殿の名残である。また社殿の北側の茂みの中に西金井出身の日清・日露戦争の戦没者の記念碑が建っている。



須賀神社



奉安殿



記念碑

一行はここから街道に戻り、桑部橋南詰めの交差点へ向かった。この付近は桑部城の丘陵があった所であるが、今はすっかり削平され朝日町方面へ向かう道路が開通してその面影もない。その道路の西端から桑部の集落へ入る。平成20年2月に実施した第10回のウォークでお邪魔した教専寺と善徳寺の山門の前を通り、長谷神社へ向かった。



教専寺



善徳寺

## 長谷神社 (ながたにじんじゃ)

伊藤 通敏

桑名郡内の延喜式内社15座の一つで、常陸国（現茨城県）鹿島神宮の祭神を勧請したといわれ、旧地は現在地より南の丘陵地の谷間である長谷にあったが、のち社殿の流出により鎌倉時代中期の正安年間に現在地に移ったと伝わる。主祭神は建御雷之男神（たけみかづち

のおのかみ)と天兒屋根命で、この祭神は春日神社の祭神であり、境内の由緒碑によれば長谷神社は桑名三崎の春日神社の先達に当たるとされている。明治時代には桑部、金井、能部にあった多くの神社を合祀している。神社の北側には日露戦役記念碑(明治40年建立)、忠魂碑(昭和15年建立)、五箇条の誓文碑などが建っている。五箇条の誓文とは明治維新の際、天皇が神に誓うかたちで宣布した新政府の基本方針で、この誓文碑はもと桑部小学校にあったが戦後現在地に移されたものである。

一行は参拝もそこそこに、本日の最大の目的地である納豆工場の見学時間が迫っているので歩みを急いだ。



長谷神社



説明する著者



五箇条の誓文碑

## 小杉食品

## 集山 一廣

長谷神社からは参加者の半数ぐらいの先発隊を誘導して、通行量の多い道路の歩道部分をひたすら歩く。最後のお目当てである小杉食品に向かう。うっそうとした樹林帯に囲まれた日立金属桑部工場の斜め脇の道に入ると、今までの車道の喧騒を忘れるような小住宅が建ち並ぶ小路にほっとする。何度も下見を行なったコースづくりで発見した近道の土手道と農道を一列になって歩く。何だか蟻さんの行列のようだ。

小杉食品は表からではなく駐車場から入るコースとしたので、小杉食品の社員さんが所々に立って笑顔で出迎えてくれた。



東名阪自動車道の下を通る



入口で手洗いとうがいをする



小杉産業

小杉食品は昭和8年(1933)、小杉金吾が創業。創業者が故郷の新潟から桑名に移り住んで3年目のことである。当時、納豆があまり食されていない桑名で、あの故郷の懐かしい味である納豆を食べたいと思う心と、この地で作って広めたい気持ちが一つとなって、粘り強い生来の精神を今日まで受け継いできたという。現在の社長は4代目である。

工場見学とレクチャーに入る前に雑菌を持ち込まないようにと玄関脇にある手洗いで、うがいと手を石鹼で入念に洗って入室した。先発隊は先に見学エリアにて製造工程の説明を聞きながら、ガラス越しに工場内部を見学し、後発隊が集まるのを待って一緒に小杉社長控えるレクチャー室に座った。後発隊はレクチャー後に工場見学することになった。スライドを映しながら小杉社長の軽妙な語り口に笑いやどよめきが湧き上がり、さながら講談師のようである。

近年、菰野の農家と栽培契約をして、様々な消費者の要望に応えた多種類の納豆づくりに工夫と努力を怠らないという。地元小学校の3年の児童も学習に来ていて、納豆の効用を分かりやすく学ぶことで、もっと好きになってもらいたいと話していた。

レクチャーの後は納豆を試食させて頂き、保冷手提げ袋のお買い得セットも用意されていた。玄関の外にも納豆の自販機があり、単品で買うことが出来る。小杉食品の至れり尽くせりの対応に感謝しつつ、玄関先の「納豆石」のモニュメントに見送られながら、小杉食品を後にした。



レクチャーの様子



工場見学

試食



ドライナットウ



黒豆納豆



納豆のマヨネーズ和え



## 員弁川水管橋から在良駅へ

岡本 浩平

小杉食品を出て、東名阪自動車道を潜って員弁川水管橋を渡った。

この橋は、三重県企業庁が建設した北伊勢工業用水の員弁川を跨ぐ水管橋である。愛知県の稲沢市で木曾川から取水した水資源機構営の木曾川用水を弥富送水機場で分水し、四日市の山村浄水場を経て北勢地方の企業、工場に水を供給している。水管は直径1.8m、長さ230.4m2本で管の上を人が渡ることができるようになっている。昭和49年6月に竣工した。

橋を渡ると在良駅までは600mほど。好天に恵まれ、参加された皆さんのよき協力を得て、予定したスケジュールどおりに終えることができた。



員弁川水管橋



第31回北勢線の魅力を探る 報告書  
「東西金井の古里を辿り こだわりの納豆を知る」

編集・発行：北勢線の魅力を探る会

代表：近藤順子

連絡先：いなべ市員弁町大泉732

TEL 080-3073-3313

E-mail [j-kondo@cty-net.ne.jp](mailto:j-kondo@cty-net.ne.jp)

発行日：2019年5月26日

本報告書の著作権は上記発行者に帰属しています。  
ご利用の際はご一報ください。

ブログ：<http://blog.canpan.info/hokuseisenn/>